

# 状態変化を表す軽動詞「する」： 「AをBにする」構文の統語分析

山田 昌史

島根県立大学

本稿では、軽動詞「する」を述部の主要部に持つ「AをBにする」の形式を持つ構文について、その統語的・意味的特徴を観察し、その特徴を捉えられる統語構造を提案した。この構文は、統語的には二格名詞が軽動詞「する」と結束性を示し、それがヲ格を項に選択する他動詞的な特徴を示し、意味的には使役事象と変件事象を一つの文で表す結果構文と相同の特徴を示すものである。そこで、この構文の統語構造を、Hasegawa (1998)の結果構文の統語構造を礎に、拡散形態論 (= Distributed Morphology : Halle & Marantz (1993)、Marantz (2001)等) から捉え直し、この構文の統語構造を提案し、そこからこの構文の諸特徴が導き出されることを主張した。

## 1. はじめに

本稿は、これまで従属節に生じる構文として分析されてきた「AをBに(して)」の形式 (cf. 村木 (1983)、寺村 (1983)等) について、これが主文に生じる際、つまり、軽動詞「する」を述部の主要部とする「AをBにする」の形式を持つ構文 (本稿では、これを「AをBにする」構文と呼ぶことにする。) がどのような統語的、意味的特徴を持つのか観察し、それらの特徴が統語構造から捉えられることを提案するものである。

主文に生じる「AをBにする」構文は、表面的にはヲ格と二格の2つの名詞句が「する」と共起し構文を作っているが、その統語的性質を精査すると、二格名詞と軽動詞「する」が

結束し、それがヲ格名詞を選択しあたかも他動詞のように振る舞う構文であることが明らかとなる。また、意味的には「する」という動作主体の意志的動作を表す動詞でありながら、その主体的動作によって、動作の被対象であるヲ格名詞がニ格名詞で表された結果状態に変化することを表す、いわば、状態変化動詞を含む他動詞文、または、結果構文と同様の意味を表す。このことから、本構文は統語的・意味的に他の軽動詞「する」を含む文とは異なる特徴を持っているといえる。また、これまで軽動詞「する」については、統語的・語彙概念的な分析が多数提案されてきた。しかし、本稿が議論する主文に生じる「AをBにする」構文については、基本的な性質はあまり議論されてこなかった(cf. 森田 (1995))。そこで、本稿は、本構文の統語的・意味的特徴を観察し、それらが統語構造から捉えられることを提案する。これによって、軽動詞「する」に対して新たな視点から理論的枠組みを提示できると思われる。特に本稿は、本構文が結果構文と相同であることを指摘し、それについての統語分析(cf. Hasegawa (1998))を基に、拡散形態論(= Distributed Morphology)(cf. Halle & Marantz (1993), Marantz (2001), Embick & Marantz (2008)等)の概念を組み入れた統語構造を提案する。そして、この統語構造から主文に生じる「AをBにする」構文の諸特徴が捉えられることを主張する。

本稿の構成は以下である。2節では、主文に生じる「AをBにする」構文の統語的・意味的特徴を観察し、この構文が統語的に他の軽動詞「する」とは異なる特徴を持つこと、そして、意味的には「する」という動作主の主体的動作の意味を持つにもかかわらず、構文全体は状態変化を表し、結果構文と同様な意味的特徴を持つことを観察する。3節では、2節での観察に基づいて、「AをBにする」構文の統語構造を提案し、それから本構文の持つ諸特徴が導き出されることを主張

する。最後に本稿をまとめる（4節）。

## 2. 「AをBにする」構文の特徴

本節では、主文に生じる「AをBにする」構文の特徴を (I) 統語的観点、(II) 語彙意味的観点から観察する。付帯状況を表す「AをBに(して)」の形式を持つテ形節については、その特徴が既に詳細に観察されている (cf. 村木 (1983)、寺村 (1983)等) が、主文に生じる本構文については、その特徴が十分に観察されてこなかった。本構文は、統語的・意味的に従属節のものとは異なる性質を持つ点がある。本節では、本構文の特徴を、必要に応じて従属節のものと比較しながら明らかにする。

2.1 節では、この構文の統語的特徴を観察し、二格名詞と軽動詞「する」が結束性 (cf. 村木 (1983)) を示し、それがヲ格名詞を選択する他動詞的な性質を持つことを明らかにする。2.2 節では、この構文の意味的な特徴を観察することで、それがヲ格名詞の結果状態を二格名詞が表す、結果構文と相同な意味を持つことを明らかにする。最後に本節をまとめる (2.3 節)。

### 2.1. 統語的特徴

本節では、主文に生じる「AをBにする」構文の統語的な特徴を観察していく。

まず、この構文を構成するヲ格名詞句、二格名詞句の2つの名詞句について観察する。日本語はスクランブリングを許す言語であるため、本構文を形成する2つの名詞句もスクランブリングにより二格、ヲ格の名詞句が自由な語順で文を形成できることが予測される。しかし、以下のように、2つの名詞句は常にヲ格名詞、二格名詞の順に生起し、入れ替えが

できない<sup>1</sup>。

- (1) a. タバコを手にする。  
b. \*手にタバコをする。

また、本構文では、ヲ格と二格名詞の間に副詞を介在することができるが、二格と「する」の間にはできない。

- (2) a. 息子を無理矢理医者にした。  
b. 離れを一時的にアパートにした。  
(3) a. \*息子を医者に無理矢理した。  
b. \*離れをアパートに一時的にした。

(3)は文法的に感じられるが、それは「無理矢理した」「一時的にした」として解釈されるのであって、「医者にした」「アパートにした」のがそれぞれ「無理矢理」「一時的」であるとは解釈されない。

さらに、以下のように、本構文から受け身文を形成すると、ヲ格名詞句を主語に繰り上げての受け身文は可能だが、二格名詞句を繰り上げての受け身文は不可能である。

- (4) a. 太郎がタバコを口にされた。  
b. タバコが太郎に口にされた。  
c. \*口が太郎にタバコをされた。

これらの事実から、二格名詞句と「する」の結びつきが強く、いわば一体化し、それがヲ格名詞句を選択しているといえる。つまり、統語的には二格名詞句と「する」は結束性 (cf. 村

---

<sup>1</sup> 「AをBにする」の形式を持っていても、以下のように着脱を表すもの (cf. 影山 (1996)) はスクランプリングを許す。

- (i) a. ピアスを耳にする。  
b. 耳にピアスをする。

本稿では、このようなスクランプリングを許す本動詞的な「する」を基体を持つ例については議論の対象から外す。

木 (1983)) を持ち 2 つが一体となって、他動詞的に働いてその内項としてヲ格名詞句を項とし選択しているといえる。

本節では、「A を B にする」構文の統語的性質を観察した。この観察から、この構文は統語的には軽動詞「する」が二格名詞句と結束し、1 つの他動詞のように振る舞い、それがヲ格名詞句を項として選択している構文であることが明らかとなった。

次節では、この構文の意味的特徴を明らかにしていく。

## 2.2. 意味的特徴

前節では、「A を B にする」構文の統語的特徴を観察した。本節では、この構文の意味的特徴、特に、語彙意味的な特徴を観察する。

主文に生じる「A を B にする」構文について、森田 (1995) は「対象 A を B の状態に変える“化成”で「～になる」と入れ替えが可能である (森田 (1995) : 57)」としている。これは以下から例証される。

- (5) a. 息子を医者にする。  
b. 息子が医者になる。
- (6) a. 石けんをいいにおいにする。  
b. 石けんがいいにおいになる。

このように、「A を B にする」構文は、「A が B になる」の形式を持つ構文と言い替えが可能である。このことから、前者が後者を包含していると考えられる。このことは以下の例から確かめられる。

- (7) a \*父親は息子を医者にしたが、息子が医者にならなかった。  
 b. \*その会社は石けんをいいにおいにしたが、石けんが  
 いいにおいにならなかった<sup>2</sup>。

(7)は「AをBにする」構文に「AがBになる」を否定した文を接続したものである。これらの文が成り立たなければ、前者は後者を含意することとなる (cf. 池上 (1980))。 (7)の文法性から「AをBにする」構文は、「AがBになる」を含意するといえる。

さらに、以下のような例から、「AをBにする」構文が成立するためには、「AがBになる」構文の成立が前提となることが明らかになる。

- (8) a. \*学長は 2500 人を前にした。  
 a'. \*2500 人が前になった。  
 b. \*日本は東京を中心にした。  
 b'. \*東京が中心になった。  
 c. \*電車の遅れを口実にした。  
 c'. \*電車の遅れが口実になった。

これらの例は、村木(1983)が付帯状況を表す「AをBに(して)」の従属節では文法的になる例(「学長は 2500 人を前に(して)演説した」のように)であるが、主文に生じると「A

---

<sup>2</sup> 森田 (1995)は、「AをBにする」構文は化成を意味するとするが、以下のような例を観察すると、単なる化成に加えて結果として取り立てる必要がある価値を付け加えていることが分かる。

- (i) a. よく売れるように石けんをいいにおいにする。  
 b. 目をまっ赤にして泣いている。  
 (ii) a.\*よく売れるように石けんをにおいにする。  
 b.\*目を赤にして泣いている。

(ii)は(i)から「いい」「赤」をとって作った例であるが、これらは容認されない。このことから、二格名詞句がヲ格名詞句の結果状態に加えて、それに新たな価値を付け加えていることが分かる。

を B にする」構文が形成できないだけでなく、それが含意すると考えられる「A が B になる」構文が生成されない。このことから、「A を B にする」構文が成立する前提条件となるのは、「A が B になる」構文を含意して、構文全体が結果を表すということである。

さらに、以下のような例を観察する。

- (9) a. UNESCO は、平泉を世界遺産にした。  
b. 母は、ご飯を大盛りにした。  
c. 花子は、豚肉のかたまりを丸焼きにした。  
d. 東国原知事は、宮崎を元気にした。

これらの例でも、ヲ格名詞句が、二格名詞句が表す意味内容に変化することを表している。このことは、以下のように(7)と同じような文構造の文法性を観察することで明らかとなる。

- (10) a. \*UNESCO は平泉を世界遺産にしたが、平泉は世界遺産にならなかった。  
b. \*母はご飯を大盛りにしたが、ご飯は大盛りにならなかった。  
c. \*花子は豚肉のかたまりを丸焼きにしたが、豚のかたまりは丸焼きにならなかった。  
d. \*東国原知事は宮崎を元気にしたが、宮崎は元気にならなかった。

(10)でも、前節の「A を B にする」構文を後節の「A が B になる」構文で否定すると文法的な文が生成されない。このことから、(9)の「A を B にする」構文は結果の含意があることが確かめられる。

興味深いのは、(9)の例を「A を B にする」構文から派生するといわれる付帯状況を表す「A を B に (して)」節 (cf. 村木 (1983)) を作ると、テ形節であれば容認されるが、「して」

を削除した「AをBに」の形式では容認されないことである。

- (11) a. UNESCOは平泉を世界遺産に\*(して)、年次大会を閉会した。  
b. 花子は豚肉のかたまりを丸焼きに\*(して)、お客に振る舞った。  
c. 母はご飯を大盛りに\*(して)、息子に食べさせた。  
d. 東国原知事は宮崎を元気に\*(して)、知事を辞職した。

「AをBにして」節から「して」を削除した「AをBに」節は、常に付帯状況を表す。一方、「して」を伴う「AをBにして」の「テ形節」は、「する」の連用形「し」が存在し、これが二格名詞句と共に（付帯状況の意味に加えて）結果の意味を表していると考えられる。そして、テ形節が結果の意味を強いられると「して」を削除した「AをBに」という形式は容認されなくなると考えられる。この事実からも、二格名詞句と「する」は意味的に一体化して状態変化の意味を表しているといえる。つまり、「AをBにする」構文は状態変化を表すもので、ヲ格名詞句が変化主体でその変化状態を二格名詞で表しているのである。

本節では、「AをBにする」構文の意味的特徴を観察した。本構文は、変化主体をヲ格名詞句で表示し、その変化結果を二格名詞で表しており、また、二格名詞句と「する」が一体化して状態変化を表す。また、この構文は、動作主体の使役動作によって被動作主体の状態変化が導かれていることから、結果構文と相同な意味を表しているといえる。

次節で、本節までに観察した本構文の特徴をまとめる。

### 2.3. 「AをBにする」構文の特徴

ここまで、「AをBにする」構文について、その統語的、意味的特徴を観察してきた。「AをBにする」構文は以下のよ



うな特徴を持つとまとめられる。

- (12) a. 軽動詞「する」と共起するヲ格、二格で標示される2つの項は、「ヲ格—二格」の順で生じ、スクランプリングを許さない。
- b. 二格名詞句と軽動詞「する」が結束性を示し、いわば1つの動詞のように働く。
- c. 「AがBになる」を含意し、動作主体の動作の結果、変化主体であるヲ格名詞の状態変化のありようを二格名詞で標示する構文で、結果構文と相同な意味を表す。

このような特徴を持つのが主文に生じる「AをBにする」構文である。これは、付帯状況を表す「AをBに(して)」節とは異なる特徴である。

本構文は、主体の動作の結果、変化主体の結果状態を表す構文であることから、意味的には結果構文と同様の意味内容を持っている。そこで、語彙概念構造(=LCS)の観点から本構文を分析しておく。

影山(1996)は、結果構文のLCSを以下のように提案している。

(13) [ x ACT y ] CAUSE [ BECOME [ y BE z ] ]<sup>3</sup>

この提案を踏襲して、「AをBにする」構文は、以下のような結果構文と相同な語彙概念構造を持つと仮定する。

(14) [ x ACT y ] CAUSE [ BECOME [ y BE z ] ]

---

<sup>3</sup> 影山(1996)は、結果構文を形成することができる動詞には2つのタイプがあり(cf. Washio(1997))それぞれ別のLCS内の派生メカニズムによって(13)のLCSが形成されるとしている。本稿では、「AをBにする」構文は、影山の提案する結果構文のLCSの最終的な構造のみを採用して議論する。

本節で観察した統語的・意味的特徴が統語構造から捉えられることを次節で示し、本構文に対して理論的な枠組みを提案する。

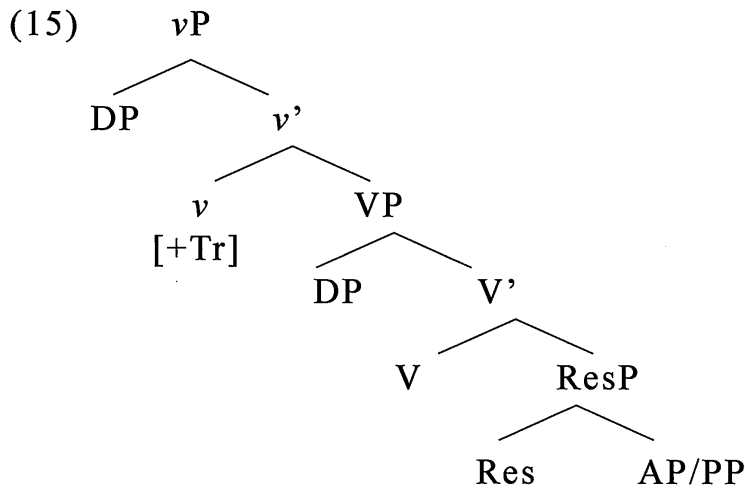
### 3. 提案

本節では、主文に生じる「A を B にする」構文の(12)の統語的、意味的特徴と(14)の LCS で示した構文の持つ語彙意味論的特徴が、統語構造から捉えられることを提案する。具体的な提案に入る前に、まず、主体の意志的動作の結果として被動作主の状態変化を意味し、その結果状態を二格で標示する結果構文の統語分析(Hasegawa (1998))について概観する(3.1節)。そして、Hasegawa の提案する結果構文の統語構造を礎に、拡散形態論 (cf. Halle & Marantz (1993)、Marantz (2001)、Embick & Marantz (2008)) を組み入れて、「A を B にする」構文の統語構造を 3.2 節で提示する。

#### 3.1. Hasegawa (1998)

2 節で本稿が議論している主文に生じる「A を B にする」構文は、結果構文と同様の意味を表すことを述べた。そこで、本節では、結果構文の統語構造を提案する Hasegawa (1998) を概観し、この分析を本稿が議論する主文に生じる「A を B にする」構文の統語構造を次節で提案する際の礎とする。

Hasegawa (1998)は、結果構文は普遍的に以下の統語構造から派生されることを提案している。



(Hasegawa (1998): 41)

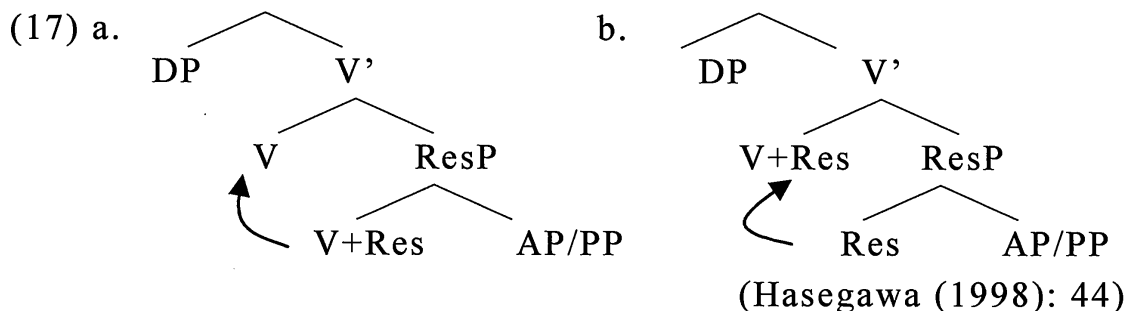
Hasegawa (1998)は、結果構文は結果状態を表す独立的な機能範疇である ResP を備える統語構造から派生するとしている。この ResP は、結果状態を表す LCS の下位事象、BE と同様な意味機能を果たすが、統語的には ResP の上位に位置する V の表す出来事と ResP 内に生じる AP/PP の表す結果状態・変化位置を結びつける働きを持つとされる。そして、この Res と V が結合した時のみ、結果構文が派生されるとする。具体的な例で Hasegawa の分析を概説する。

- (16) a. John painted the house red.  
 b. The jogger ran the Nikes threadbare.

(Hasegawa (1998): 31)

(16a)の主動詞 paint は達成動詞であるが、これは本来的に結果を含意する。そのため、paint は ResP 内の主要部 Res の位置に音形を持たない Res と共に生起する。それが、上位の V に移動する(cf. (17a))。一方、(16b)の run は活動動詞である。これは、本来的に結果の意味を持たないため、ResP 外の V の位置に生じる。そして、音形を持たない Res が V に移動して V と Res が結合することで、文法的な結果構文が派生する

とされる(cf. 17b)。



一方、日本語の結果構文は、(18)のように英語と異なり、活動動詞から結果構文を派生することができない。

- (18) a. 花子がガラスを粉々に割った。  
 b. \*花子が金属を平らにたたいた。  
 c. 花子が金属を平らにたたき延ばした。

(Hasegawa (1998): 34-35)

日本語では、結果構文は達成動詞(cf. (18a))の場合、それに結果述語を共起させるだけで文法的な文が生成するが、活動動詞は(18b)のようにそれができない。しかし、活動動詞であっても(18c)のように結果を表す動詞を複合させ、複雑述語を形成することで文法的な結果構文が生成される。つまり、日本語は、主動詞の語彙意味的特徴が結果構文の生成に関与する(cf. Washio (1997))。Hasegawa (1998)では、達成動詞は(17a)のように普遍的にVとResが結合して統語構造に導入されるとされる。そして、その結合したものが上位のVの位置に移動して文法的な結果構文が派生する。これは、英語の例(cf. (16a))と同様の派生である。しかし、活動動詞(cf. (18b))は結果を含意しないため、VとResが一体となって統語構造に導入されず、別々に統語構造に導入される。英語では、音形を持たないResが統語構造でVに上昇して結合することで結果構文が生じる(cf. (17b))。Hasegawaは、日本語では音形を持

たない Res が存在しないと仮定し、このことで、日本語では (17b) のような派生メカニズムによって結果構文が派生されないとする。しかし、この Res が結果を表す動詞として音形に現れて統語構造に導入されると、(16b) の英語の結果構文と同じように V と Res が統語構造内で結合して、文法的な結果構文が生成されるとされる。つまり、日本語と英語の結果構文における言語的な違いは、Res が音形を持たずに統語構造に導入できるか否かの違いによると分析される。

このように、Hasegawa (1998) の提案する結果構文の統語構造は、(A) LCS の下位事象の BE に当たるような範疇 ResP を仮定することで統語構造において結果の意味が捉えられ、(B) ResP の主要部 Res は、活動動詞の場合、音形を持たない要素でそれが統語上で V に移動し V と Res が結合することで結果構文が生じ、達成動詞の場合、V と Res が結合した状態で統語構造に導入されると分析することで、動詞の語彙的違いによる結果構文の違いが説明され、(C) 英語と日本語に存在する活動動詞の結果構文の生成可能性の差異は、音形を持たない Res を言語が許すか否かによって捉えられる、といった点に特徴があり、結果構文の普遍性と個別性が適切に説明できる。

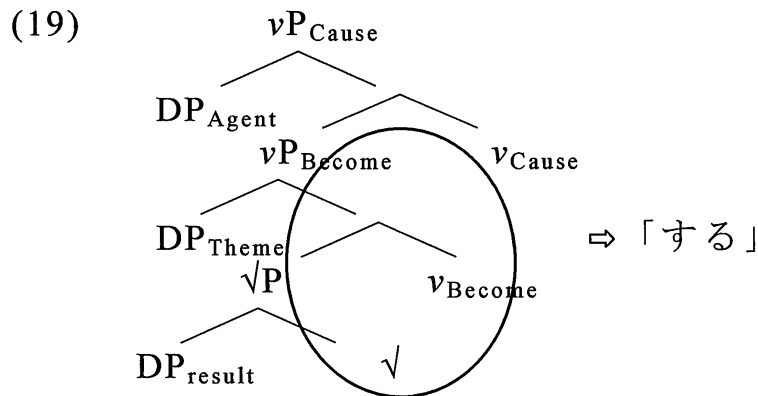
本稿にとって Hasegawa (1998) の分析が重要なのは、統語構造に結果を表す機能範疇を導入することでその範疇が持つ特質によってこの構文持つ結果の意味を予測できる点、また、使役と結果の 2 つの事象を統語構造上において結びつけることができる点である。

次節で、Hasegawa (1998) の結果構文の統語構造を礎として、主文に生じる「A を B にする」構文の統語構造を提案し、2 節で観察した本構文の特徴が統語構造から捉えられることを主張する。

### 3.2. 提案

本節では、(12)で述べた「AをBにする」構文の特徴が統語構造によって捉えられることを提案する。特に本節では、3.1節で概説した Hasegawa (1998)の結果構文の統語構造を礎に拡散形態論の提案を採用しながら、本構文の統語構造を提案し、(12)としてまとめた特徴が提案された統語構造から説明できることを主張する。

本稿が提案する主文に生じる「AをBにする」構文の統語構造は以下である。



本稿の提案する統語構造は基本的には Hasegawa (1998)の構造(cf. (15))を礎にしているが、(A) ResPではなく、 $\sqrt{P}$ を導入している点、(B) 本動詞(V)と little  $v$ を主要部に持つ機能範疇(=  $vP$ )ではなく、2つの意味的な素性を持った little  $v$ を導入している点が異なるものの、投射する項の数と位置については同様である。Hasegawaは、結果構文の語彙意味的特徴を統語構造に反映するために、(15)のような構造を仮定するが、本稿では、より明確に LCSの語彙意味的特徴を統語構造から読み取らせるため、(19)のように LCSの意味関数(Becomeと Cause)を素性として持つ2つの little  $v$ ( $v_{\text{Become}}$ と  $v_{\text{Cause}}$ )を仮定し、そして、 $\sqrt{}$ がこれら2つの機能範疇と結合することで主文に生じる「AをBにする」構文の語彙意味的な特性、つまり、使役事象と結果事象を含む状態変化を表す「する」

が生じると主張する。

また、本稿では、軽動詞「する」の基体は $\sqrt{\quad}$ とする。この提案は、Grimshaw & Mester (1988)が軽動詞「する」が以下のような項構造と格を持つとした分析を、拡散形態論 (Halle & Marantz (1993)、Marantz (2001)、Embick & Marantz (2008)等)の提案をふまえて捉え直したものである。

(20)  $\text{suru, V; ( )} <\text{acc}>$  (Grimshaw & Mester (1988): 211)

(20)では、軽動詞「する」は、それが選択する動名詞 (=Verbal Noun) の項構造を引き継ぐとされる。そして、引き継いだ項構造に従って、「する」と共起する項のあり方が決定される。本稿では、 $\sqrt{\quad}$ である軽動詞「する」自体はその統語範疇が未指定で、項構造も持たないが、それが統語構造で最初にそれと併合 (=merge) する要素の特徴を引き継ぐと分析する。

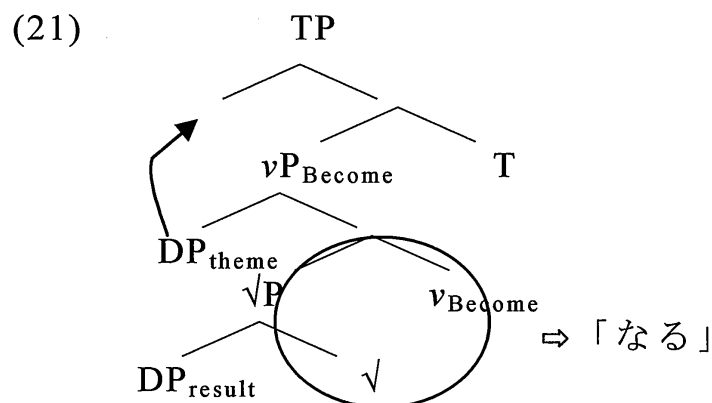
そして、 $\sqrt{P}$  が  $v_{\text{Become}}$  と結合する。Marantz(2001)、Embick&Marantz (2008)に従って、 $\sqrt{\quad}$ は上位の機能範疇と結合することで、その機能範疇の特性によって語彙範疇 (ここではV) が指定されるとする。つまり、(19)で $\sqrt{\quad}$ が上位の little  $v$  と結合することで動詞としての性質が指定されことになる。これは、Borer (2003)の動詞の語彙意味的特性は、動詞がどのような機能範疇をもつ統語構造に導入されるかによって決まる、つまり、動詞の語彙特性は統語構造から導きだされるとの主張ともつながる。本稿でも、 $\sqrt{\quad}$ が導入される統語構造に投射されている機能範疇の特性によって、軽動詞「する」の意味特性が決定されると提案する。また、前節で Hasegawa (1998)が結果構文の統語構造において、普遍的に Res が V と結合することで結果構文が生成すると主張していることを概説したが、本稿でも $\sqrt{\quad}$ が  $v_{\text{Become}}$  に上昇し2つが結合することで、 $\sqrt{\quad}$ が結果の意味を持つことが保証されるとする。これは、Hasegawa の分析と同一の効果を持つことになり、構文全体が

結果を表すことが導かれる。また、 $\sqrt{+v_{\text{Become}}}$  が名詞句を指定部に要求し、それが変化主体となる。

$\sqrt{+v_{\text{Become}}}$  がさらに上位の機能範疇である  $v_{\text{Cause}}$  に結合し、動作主をその主要部に要求する。この機能範疇は、Chomsky (1995)、Collins (1997)などが提案する他動性を持つ  $vP$  と同様であるため、「A を B にする」構文が使役事象を表すことと、対格を持つ名詞句（ヲ格名詞）が構文に存在することが保証される。拡散形態論に従って、 $\sqrt{+}$ 、 $v_{\text{Become}}$ 、 $v_{\text{Cause}}$  の3つの主要部が結合し、音声部門で「する」となる。このように、統語構造内に2つの機能範疇を仮定することで、「A を B にする」構文が使役事象と結果事象の2つを含むことが予測され、構文全体が結果構文と相同な意味内容を持つことを予測する。

(19)の統語構造から前節でまとめた(12)の「A を B にする」構文の特徴が導き出される。

前述の通り、「A を B にする」構文は「A が B になる」構文を含意する。このことは、本構文が結果を意味する所以となることは既に述べた。本稿の提案では、 $\sqrt{+}$ が  $v_{\text{Become}}$  と結合することで、構文全体が変理事象を表すこととなる。この提案は、「A が B になる」の構文は(21)の統語構造から派生することを示唆する。



(21)では、 $\sqrt{+}$ と  $v_{\text{Become}}$  が結合して、変化の含意を持つこととなる。2つの結合体に変化主体となる名詞句を要求するが、そ



の上位に  $v_{\text{Cause}}$  がないため、それに対格が付与されず、T から主格をもらう。そして、 $\sqrt{\quad}$ と  $v_{\text{Become}}$  が結合したものが音韻部門において「なる」となり、「A が B になる」構文が派生すると仮定する。(21)の上位に  $v_{\text{Cause}}$  が併合して(19)の構造が派生することから、(19)の構造は、(21)を含むこととなり、「A を B にする」構文は必ず「A が B になる」構文を含むこととなる。また、この分析から、(19)の  $v_{\text{Become}}$  の上位に  $v_{\text{Cause}}$  が併合しなければ、 $\sqrt{\quad} + v_{\text{Become}}$  が「なる」を含む構文となり、それが結合すれば、 $\sqrt{\quad} + v_{\text{Become}} + v_{\text{Cause}}$  が「する」を含む構文を生成する。このように、 $v_{\text{Become}}$  の上位に  $v_{\text{Cause}}$  が併合するかによって、2つの交替を予測できる。

本稿の提案は上述のように「A を B にする」構文が「A が B になる」構文の成立を前提にすることになるが、以下のように、「A が B になる」構文が成立しても、「A を B にする」構文が成り立たない例が存在する。

(22) a. \*運動会を直前にした。

a'. 運動会が直前になった。

b. \*学校の先生になったのをきっかけにした。

b'. 学校の先生になったのがきっかけになった。

これらの例は「A が B になる」構文が文法的であるが、「A を B にする」構文が非文法である例である。本稿では、前者の構文の成立すれば後者の成立が可能となるはずだが、これらの例では「なる」が成立しても「する」が派生しておらず、本稿の提案にとって反例となると思われる。しかし、(22)の例で「A が B になる」構文に含まれる「なる」は、これまで議論してきた変化を表す「なる」とは性質が異なる。

佐藤(2005)は「なる」は変化の意味に加えて非変化も表すことができるという。

- (23) a. 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞になる。  
b. このあたりは、葛飾区になる。  
c. お手洗いは、階段を上がった2階になります。

(佐藤 (2005) : 12)

(23)の例では変化の意味を持っているが、変化を表さない解釈も持ち、後者の方が自然な解釈である。また、(23)の各例は、コピュラ文(例：このあたりは、葛飾区だ)を形成することができることから、変化を表さない解釈を持つことが明らかである。つまり、「AがBになる」の形式は、変化と非変化の2つの意味を表すことができる。本稿で議論している「AをBにする」構文は、統語構造において、 $\sqrt{\quad}$ と  $v_{\text{Become}}$  が結合することで生成するため、必ず、変化の意味を含意する。つまり、(22a')(22b')の「なる」を主動詞として持つ文は、変化の「なる」ではなく、不変化の「なる」で、(21)の統語構造から派生されたものではない<sup>4</sup>。そのため、その上位に  $v_{\text{Cause}}$  を結合して「AをBにする」構文を生成することはできないと分析される。このように、本稿の提案は(22)のような一見反例となりそうな例についても、その生成可否が正しく予測されるのである。

また、「AをBにする」構文では、二格名詞句が義務的でこの要素が結果の様態を表すことはこれまでに述べてきた。この二格名詞句だが、Hasegawa (1998)の結果構文の統語構造では Res の補部の位置に二格名詞句が生じていたが、本稿では  $\sqrt{\quad}$  の補部に二格名詞句が生じている。これは Takezawa (1993)が、二格で標示される日本語の二次述語が動詞によって主要部統御される位置、つまり、動詞の投射内に生じるとする分析に沿ったものである。本稿の統語構造では、 $\sqrt{\quad}$  と最

<sup>4</sup> 本稿では、不変化の「なる」については統語構造等、詳細な議論はせず、単に(21)の統語構造から派生するものではないとしておく。これらがどのような統語構造から派生されるかは今後の課題となる。

初に併合するのがこの二格名詞句で、これの意味的特徴が√に引き継がれることになる。また、(12a)-(12b)でまとめたように、二格名詞句はスクランブリングや受動化の適用を受けず、二格と「する」が結束性を示している。この事実は、√と二格名詞句の統語構造内での結合のあり方から捉えられる。前述のように、√はその上位の $v$ と結合することでその語彙範疇が決定されるため、二格名詞句と√との結合の段階(√P)は√の語彙範疇指定がなされる前である。つまり、この√Pは語彙範疇が未指定の段階である。このことから、本稿では、二格名詞句と√が形成する√P全体は一つの語彙として働くと仮定する。これにより、二格名詞句と「する」が結束して語彙として働くため、2つの要素の結束性が予測でき、また、語の一部の二格名詞に対して統語的な操作(スクランブリングや受動化)をすることができないことが予測される。この分析により、(12a-b)の特徴が(19)の統語構造から説明される。

このように、(19)のように Hasegawa (1998)の結果構文の構造を礎に、拡散形態論の考え方を組み入れて統語構造を措定することで(12)でまとめた「AをBにする」構文の統語的、意味的特徴を説明できるのである。

次節で本稿をまとめる。

#### 4. 結語

本稿では、主文に生じる「AをBにする」構文の特徴を観察した。本構文は、統語的には二格名詞句と軽動詞「する」が結束性を示し、ヲ格名詞句を選択している。この結束性のために二格名詞句に対して、スクランブリング、受動化などの統語的操作が適用されない。また、意味的には結果構文のような使役事象と結果事象を1つの文で表している。つまり、「する」という主体動作を表す動詞が使役・結果までにも意味的に拡張されている構文であるといえる。

本稿では、Hasegawa (1998)の結果構文の統語構造を礎に、拡散形態論の考え方を導入して、「A を B にする」構文の統語構造を提案し、提案した統語構造から、上記の「A を B にする」構文の統語的、意味的特徴を捉えることができると主張した。

本稿の提案は以下のようにまとめられる。

- (A) 状態変化を表す軽動詞「する」は、統語構造において $\sqrt{+v_{\text{Become}} + v_{\text{Cause}}}$ が結合することで生じる。
- (B) (A)のような素性標示を持った little  $v$ がこの構文の意味的特徴を生じる。つまり、統語構造上からこの構文が使役事象と結果事象を持つことを予測できる。
- (C) 「A を B にする」は変化を表す「A が B になる」を含意するが、これは、後者の統語構造である $\sqrt{+v_{\text{Become}} + v_{\text{Cause}}}$ に $v_{\text{Cause}}$ が結合することで前者が生成すると分析するため、2つの構文の含意関係が捉えられる。
- (D) 結果状態を示す二格名詞句が軽動詞「する」の基体である $\sqrt{}$ と最初に結合し $\sqrt{P}$ を形成する。これは、語彙範疇が指定される前の段階であることから、 $\sqrt{P}$ は一つの語彙として働くことになる。これにより、二格名詞句と「する」の2つが結束性を示し、また、統語的操作の適用を拒むことが予測される。

このように、本稿が提案した(19)の統語構造により、「A を B にする」構文の諸特徴を捉えることができる。本稿の提案は、Borer (2003)が動詞の語彙意味的特徴は動詞がどのような機能範疇を携える統語構造に導入されるかによって決まるという提案と軌を一にする。

本稿が提案した統語構造から軽動詞「する」について、以下のようなことが予測される。そのため、本稿の提案によって動詞の語彙意味と統語構造の関係についての研究に理論的

な貢献が期待される。

「する」は、(A) 名詞と共起する (ex. テニスをする)、(B) 動名詞と共起する (ex. 勉強をする)、(C) 属性解釈を持つ (ex. 青い目をしている (佐藤 (2005): 149)) など、様々な用法を持つことが知られている。これは、「する」が具体的な動作を表さないことに起因するといえる。また、(A)~(C)の例で「する」の解釈を決定しているのはその直前の名詞句であるのは明らかである。(19)の統語構造では、「する」は $\sqrt{\text{V}}$ であり、それと最初に併合する要素 (二格名詞句) の特徴がその上位の2つの機能範疇 ( $v_{\text{Become}}$  と  $v_{\text{Cause}}$ ) の働きによって軽動詞「する」が状態変化の意味となることを予測するのだが、これと同様に(A)~(C)の例においても、 $\sqrt{\text{V}}$ と最初に併合して出来上がった $\sqrt{\text{VP}}$ がその上位にどのような統語構造 (具体的には little  $v$  の組み合わせ) を持つものに生じるかによって、「する」がどのような用法を持つのが決まると分析することで説明できると思われる。つまり、Borer (2003)が主張する、語彙的な意味は統語構造において決定され、その決定に関与するのは、統語構造内に備えられる機能範疇であるとの提案に基づいて、「する」の統語構造を整備することで、本稿で論じた「AをBにする」構文だけではなく、様々な振る舞いをする軽動詞「する」に対して統一的な理論的基盤を提供できると考えられる。本稿の提案を拡張させ、「する」の全体像を明らかにすることが今後の課題である。

### (参照文献)

Borer, Hagit. (2005) *The Normal course of events*. Oxford, Mass.: Oxford University Press.

Chomsky, Noam. (1995) *The Minimalist program*. Cambridge,

- Mass.: MIT Press.
- Collins, Chiris. (1997) *Local economy*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Embick, David & Alec Marantz. (2008) Architecture and blocking. *Linguistic Inquiry* 39, 1-53.
- Grimshaw, Jane & Armin Mester. (1988) Light verbs and  $\theta$ -marking. *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.
- Halle, Morris and Marantz Alec. (1993) Distributed morphology and the piece of inflection, In ed., Samuel J. Keyser & Kenneth Hale, *The View from building 20*, 111-176. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hasegawa, Nobuko. (1988) Syntax of resultatives. 『先端的言語理論の構築とその多角的な実証(2-A)』 31-57. 神田外語大学
- 池上嘉彦 (1980) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- Marantz, Alec. (2001) Words. Unpublished Manuscript, MIT.
- 森田良行 (1995) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- 村木新次郎 (1983) 「『地図をたよりに、人をたずねる』という言いかた」 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 267-292. 明治書院
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院
- Takezawa, Koichi. (1993) Secondary predication and locative/goal phrases. In. ed., Hasegawa Nobuko, *Japanese syntax in comparative grammar*. 45-77. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- 寺村秀夫 (1983) 「『付帯状況』表現の成立の条件—『Xヲ Yニースル』という文型をめぐって」 *日本語学* 2, 38-46.
- Washio, Ryuichi. (1997) Resultatives: Compositionality, and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

697-0016

島根県浜田市野原町 2433-2

島根県立大学

総合政策学部

*ma-yamada@u-shimane.ac.jp*